公教育をイチから考えよう

リヒテルズ直子×苫野一徳

問い：「公教育」とは何か

公立の学校での教育？
一条校に定められた学校の教育？

熊本大学教育学部准教授である苫野先生と
オランダ在住の教育学者リヒテルズ先生の対談から
皆さんも一緒に考えてみましょう！

#公教育
#日本の教育
#オランダの教育
#比較教育
#教育政策

↑皆さんなら
どんなタグ付けをしますか？

時代を拓いた教師たち

-戦後教育実践からのメッセージ

田中耕治編著

問い：「良い授業」とは何か

子どもたちが積極的に発言している授業？
教材研究が深くなされた授業？

現場の教師たちは日々の「授業」を通し
子どもたちに何を伝えようとしているのか？
皆さんも一緒に考えてみましょう！

#授業実践
#教材研究
#教師の思想
#本質的な授業
#授業の本質

↑皆さんなら
どんなタグ付けをしますか？

命と向き合う教室

制野俊弘著

問い：「子どもに寄り添う」とは？

子どもの話に耳を傾けられること？
子どもの気持ちに共感出来ること？

東日本大震災で大切な人を失った子どもたち
そのとき教師は子どもに何を伝えたのか

非常事態が起きたとき、
皆さんは子どもたちに何を伝えますか？

#心の教育
#綴り方教育
#震災と教育
#学校に出来ること
#教師と子ども

↑皆さんなら
どんなタグ付けをしますか？

ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー

ブレイディみかこ著

問い：「アイデンティティの確立」のために
大人は何をする？

見守る？
揺らがないよう環境を整える？

海外にルーツを持ちながらも
日本の学校に通う子が自分の学級にいたら
何を大切に接しますか？

#アイデンティティ
#自己の揺らぎ
#教育と環境
#イギリスの学校
#比較教育

↑皆さんなら
どんなタグ付けをしますか？

『学校と社会/子どもとカリキュラム』

経験主義の大家として知られるジョン・デューイ。大学の授業で一度は必ず学ぶ人物です。シカゴ大学附属小学校での彼自身の体験から生まれた本書は、学校とはどうあるべきか、子どもにとって学びとは何かを私たちに問いかけます。何度読んでも新たな発見がある一冊です。

『教育人間学のために』

本当は、「必要」なもので、「良い」もののはずなのに、「教育」のことを考えるとなんだかもやもやする。そんな経験はありませんか？「教育は本当に人を幸せにするか？」「私たちが教育をしても”いい”とされる（そう思う）根拠は何か？」。私たちの「教育」に対する見方や価値観に問いを投げかけ、そっと立ち止まらせてくれます。教育学を学ぶあなたにこそ、読んでほしい一冊です。

『子どもと哲学を
問いから希望へ』

「なぜ空は青いの？」「花はなぜ咲くの？」幼少期、そんなことを考えたことはありませんか。

自分が問いをもち生きること、問いをもった子どもたちと生きること、私たちは教育者として、子どもたちのこの問いに対して、教育の場で何が出来るのでしょうか。

哲学と教育の可能性を考えてみませんか。

『日本教育史 ー教育の今を歴史から考えるー』

「教育とは何か？」「誰のための教育なのか？」日本の教育史上において、これらの問いはどのように応答されてきたのでしょうか。

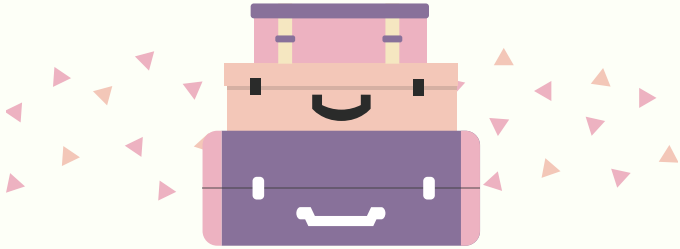
本書では、古代から現代までの日本の教育の歴史を概観します。教育を捉えなおすために「歴史を学ぶ意味は何か」ということを考えながら、ぜひ読んでみてください。

『半径５メートルからの教育社会学』

教育を語る時、誰もが最初に思い浮かべることはきっと、これまでの自分の学校生活や教育経験ではないでしょうか。それは時として自分にとって「当たり前」になり、改めて考えなおす機会は少ないと思います。

本書は、私たちの身近にある教育の「当たり前」（と思われていること）を様々なデータを提示しながら論じています。

私たちの「問い直し」を支えてくれる一冊です。



１００万回生きたねこ

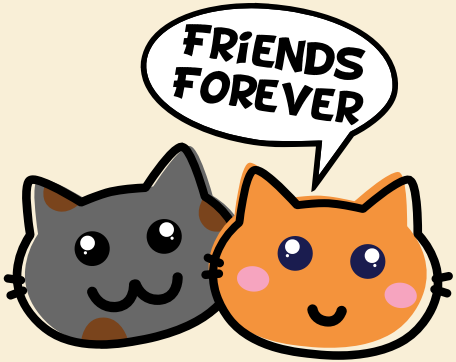
１００万回生きた猫の物語を通して、誰かを大切に想う気持ちの大切さについて考えさせられる。絵本の名作とも呼び声高い１冊。

どんぐりと山猫

宮沢賢治の初期の作品。黄金色のどんぐりたちと山猫の裁判を通しておかしな出来事が繰り広げられる。

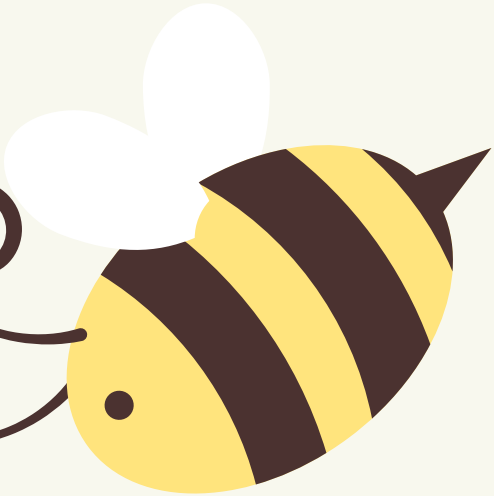
なぜ猫は鏡を見ないか？：音楽と心の進化誌

著者、作曲家の指揮者が様々な問いを通して音と心の結びつきに迫る。「響き」にあらわれる音楽と心の謎に触れてみよう。



吾輩は猫である

夏目漱石の処女作!「吾輩」である
名前のない猫から観た、ごく狭い世間
の人間模様が描かれている。
一度は読んでおきたい作品。



長靴をはいた猫

同名のバレエはペロー童話とプティパの『眠れる森の美女』に想を得て創られた。猫やオグールが活躍するこのうえなく楽しいスペクタルを、多数の写真や資料、解説などで構成する一冊。

猫とともに去りぬ

愉快な作風で、人の心を包みこみ、明晰であふれるようなユーモアの感覚を持つロダーリの代表的な短編集。20世紀イタリア文学の古典とされる。